

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

「夢十話」：キャロルと熊楠の幻想魔景

著者	平 倫子
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	78
号	3
ページ	71-88
発行年	2011-02-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/6232

「夢十話」

— キャロルと熊楠の幻想魔景 —

平 倫 子

はじめに

そもそもルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-98）と南方熊楠（1867-1941）に直接の接点があるわけではない。しかし、19世紀末の激動する英国にあって、1881年オックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジの数学教師職を退き、コモンルーム主任としてのみ大学にかかわるという比較的自由な時間を持ったキャロルと、1886年から6年間のアメリカ滞在を切り上げ、1892年から1900年までをロンドンで過ごし、大英図書館で多分野の文献に接し、独自の「事の学」を英国の学術雑誌に投稿していた熊楠との間には、意外に共振するところが多い。

ここではキャロルと熊楠に共通するキーワードを10項目あげ、二人の特徴を照合させながらエピソード風に綴ってみたい。

その1. 気質

このことに関する共通点は二つある。一つは内的なもので気質の類似。近藤俊文が『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』で言及したように、多くの宗教家、芸術家などに共通してみられる神聖な病としての「癲癇親和性気質」（160, 168）である。夢や幻視、狂気、病や死、幽霊、死後の世界、などへの強い関心を示す特徴があげられる。

そしてもう一つは旺盛な好奇心の発露、伝達メソッドの類似。幼いころからの物書き癖、おびたしい日記や書簡、回覧雑誌、本好き、新聞や雑誌などの媒体を利用して論述を展開する傾向などである。近藤は熊楠について、アリタレーション、尻づき文句、文字鎖、掛詞、語呂合わせ、類似音への耽溺などをあげ、医学者の視点で夢と幻覚の交錯に注目する（65）。

キャロルは専門の数学、論理学の研究のかたわら文学創作に打ち込んだ。熊楠は博物学の標本採集のかたわら、思想史や民俗学の論文の雑誌発表に余念がなかった。熊楠がライブニッツの言う「一切智」に倣って、往復書簡を「知識のあずけどころ」（明治44年柳田宛書簡、『南方熊楠全集』8巻、224）と見立てていたところに、独学の徒熊楠の面目躍如たるものがある。

その2. 「ネイチャー」と「ノーツ・アンド・クィアリーズ」

二人は英国で発行されていたこの権威ある雑誌の共通の読者であった。

キャロルが「ネイチャー」（1869年創刊）に投稿したものは3点ある。1887年3月31日の「日にちから曜日を割り出す方法」、1897年10月14日の「与えられた数を9または11で割る簡単な方法」、没後の掲載となった1898年1月20日の「長除法を簡単に行う方法」である。いずれも本名C. L. Dodgsonによる（*The Lewis Carroll Handbook*, 150-1）。熊楠の「ネイチャー」初投稿は1893年10月5日「東洋の星座」である。上記キャロルの1897年10月14日に近い熊楠のものに翌週の10月21日の「虫に刺されることによる後天的免疫」がある。なお「ノーツ・アンド・クィアリーズ」（1849創刊）へのCarroll/Dodgsonの投稿は『ハンドブック』には見あたらない。北米ルイス・キャロル協会のA. A. イムホルツJr. は、1999年春号の*The Carrollian*に、キャロル作品に関する書評や紹介、関連事項や宣伝広告などを「ノーツ・アンド・クィアリーズ」から67項目をあげ「『ノーツ・アンド・クィアリーズ』とルイス・キャロル、序説」を書いている。今後キャロル自身の投稿の詳細が明らかになるのを待ちたい。キャロルは終生同誌

を愛読、作品の糧にしていた。キャロルの没後、1898年5月10日にオックスフォードで行われた遺品セールの一覧に「ノーツ・アンド・クィアリーズ」の完全なそろいがあった（カタログNo. 348）。Oxford World's Classics版 *Alice* (1971) の注解者R.L.グリーンは、“チェシャー猫”の注に、1850年から52年にかけて同誌に「にやにや笑いの猫」に関する投稿が続いたこと、定期購読者だったキャロル所蔵のシリーズは現在オーピー夫妻が所有していること、などを書いている（257）。ジョナサン・コットは『子どもの本の8人』のなかで、1981年5月7日にオーピー夫妻にインタビュー、「わたしたちが見つけたときは、まだオックスフォードにあったの。ほら、創刊号に紫色のインクで彼の名前がしるしてあるでしょ」とのアイオナの言葉を紹介している（邦訳、396）。

キャロルの日記編纂者E. ウェイクリング氏の情報では、2009年初頭キャロルの書き込みの入った*Notes and Queries*の完全なそろいが高値で売りに出ていたということである。

熊楠は滞米時の1888年8月3日から「ネイチャー」の定期購読を始めた。同誌へのデビューは前述の1893年10月5日、また「ノーツ・アンド・クィアリーズ」の初掲載は1899年6月3日の「利口な子供」であった（『南方熊楠英文論考』、390）。その頃熊楠は白人殴打事件により、図書館への出入りを禁じられ、家からの送金も途絶え、失意の中にあったが、のちの代表作『燕石考』や『十二支考』の土台作りに力を注いでいた。

キャロルが「ネイチャー」誌上で Minakata Kumagusu の名前を見たかも知れないと思わせるものに、創刊25周年（1894）の記念号の特別寄稿者リストに、日本人では植物学者の伊藤篤太郎と南方熊楠の名前が載った、という事実がある（『全集別巻1』、64）。

その3. 夢

両者が夢に関心を示した端的な例をあげる。まず、キャロル24才の1856

年2月9日の日記 (*Diaries*, Vol.2,38) から,

夢をみていて……目覚めているときなら狂っているとは思えないことを言ったり、したりしないだろうか。そうだとすると狂気を、夢と現実が区別できなくなった状態と定義しては間違いだろうか。非現実的とは思えない夢をみることもある。眠りは「独自の世界」をもっており、現実と似た一面さえある。

その後もずっとこのことを考え続け、『不思議の国のアリス』に始まる作品群に定着させてゆく。L. ハーン (1850-1904) は、1896年から東大で行った講義のなかで「キャロルは、夢のヴィジョンとそれに伴って生ずるあらゆる異常感覚の、動揺、歪曲、矛盾、不条理を、読者にこれこそ夢の感覚だと思わせるようなかたちで叙述することが出来た人」と語っている (『ハーン著作集6』, 323-4)。

つぎは、27才の熊楠が1893年10月ロンドンで出会った真言宗の高僧土宜法龍に宛てた、同年12月21日の書簡から (『南方熊楠・土宜法龍往復書簡』No.7,42-3, 以下「八坂書簡x」と略),

夢は心理学上狂に相似たるものとし、すこぶる研究することなり。理外の理ということあらば、夢などもっとも然らんか。何となれば、現世に不条理なることも夢中には不条理と思わず、理と思ひおることあればなり。

1911 (明44) 年8月、熊楠は「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信」を発表した (『南方熊楠全集2』, 260)。

那智山に孤居し、空腹で臥したるに、終夜自分の頭抜け出で家の横側なる牛部屋の辺を飛び廻り、ありありと闇夜中にその状況をくわしく視る。みずからその精神変態にあるを知るといへども、繰返しかくのごとくなるを禁じえざりし。その後 Frederic W. H. Myers の *Human Personality* (1903) を読んで、世にかかる例少なからぬを知れり。されば蒙昧の民が、睡中魂抜け出づと信づるは、もっともなことにて、ただに魂が^{ひとがた}人形を現して抜け出づるのみならず、蠅、蜥蜴、鴉、鼠などとなりて、睡れる身を離れ遊ぶという迷信、諸方の民間に行なわる (Frazer, 'The Golden Bough', 1890, 参照)。

『シルヴィーとブルーノ』前篇（1889）16章で、語り手が入り込んだ「驚異と神秘の世界」で、教授の奇妙な機械によって鰐が2倍半に伸ばされ、自分の尻尾、背中、頭、額、鼻の上を歩いた、というところがある（229）。これなどはキャロルと熊楠の共通感覚と言ってよいのではないか。

その4. スピリチュアリズム

英国の心霊研究協会（Society for Psychical Research, 略称SPR）は、1882年に哲学者で倫理学者のヘンリー・シジック（1838–1900）、哲学者で詩人のマイヤーズ（1843–1901）、心霊研究家のエドモンド・ガーニー（1847–1888）らが設立、のちにアメリカのW. ジェームズ（1842–1910）も加わる。SPRは、ダーウィンの『種の起源』発表後にひろがった科学対宗教論争を一つのきっかけに、ノーベル賞級の学者、貴族、政治家ら、主として中、上流階級の知識人たちがメンバーに集った。キャロルも草創期からの会員だった。1886年、マイヤーズ、ガーニー、フランク・ポドモアらによる『生者の幻像』（*Phantasms of the Living*）が出る。これは幽霊の出現や声、予感や予知夢、生者と死者の一瞬の接触、などの情報を収集し客観的に伝えようとしたもので、マイヤーズは序文で、「宗教が科学を恐れ、科学が信仰を否定する時代に、はたして神は生き延びられるのか？その分裂の裂け目にこそ、心霊主義は雄々しく進んでゆくのだ。両者は対立するものではなく、一方が他方を説明する助けにさえることを示すために……」と述べた（デボラ・ブラム、『幽霊を捕まえようとした化学者たち』、152-3）。当時英国の心霊学者A. P. シネットの『密教』（*Esoteric Buddhism*, 1883）というヘルメス学を体系化した本が会員に愛読されていた。『シルヴィーとブルーノ』後篇序文でキャロルも「密教」に言及している。また熊楠と法龍の往復書簡にもシネットの名はしばしば登場する。

一方1893年5月～10月までアメリカでは、コロンブスのアメリカ大陸発見400周年を記念する「シカゴ万国博覧会」が開かれた。9月には万国宗教

会議も開かれ、日本から釈 宗演、土宜法龍、神智学の日本代表者平井金三らが参加した。三人は以前から仏教雑誌の執筆者として面識があり、近代仏教の改革を目指す共通認識をもっていた。その時シカゴではSPRの世界大会も催され、イギリスからマイヤーズ、オリヴァー・ロッジ、リチャード・ホジソンらが参加した。W. ジェームズは参加こそしなかったが、この年12月英国SPRの会長に就任する。

安藤礼二は、シカゴ万博を世界の西と東が会おう軸とみて当時の第一線の行動家らがそこに参集、確認、通過する「オン・ザ・ロード」の拠点になったと捉えている（安藤礼二、『場所と産霊^{むすび}』、140-6）。

その5. 1893年を切り口に—キャロルと熊楠のSPR—

キャロルとスピリチュアリズムを結びつける発端はいつ、どこでだったか。間接的には、『進化論』発表後の科学対宗教論争の中心地となったオックスフォードという場の共時性が考えられる。そして直接的には、1870年6月オックスフォード大学の総長に就任したソールズベリー卿（1830-1903）の人脈が考えられる。6月22日に総長の就任式と、H.P.リドゥンの法学博士号の授与式が行われた。6月25日キャロルは日記に、新総長の演説が素晴らしかったこと、リドゥン（1867年ともにロシア旅行をした）の紹介でソールズベリー卿一家の写真を撮る許可を得たこと、一家に歓待されたのは Alice の作者だからだと思うこと、などを記す。その後、卿の館ハットフィールド・ハウスの新年会に招かれることが多くなり、ソールズベリー卿の子ども達や、そこに集まる子ども達に、のちの『シルヴィーとブルーノ』にまつる挿話のいくつかを語り聞かせていた。

1874年暮の休暇をハットフィールド・ハウスで過ごしていたキャロルは、75年元旦の日記に「コックス氏やスライゴー卿と会って心靈学について話した」と書く。また5月19日の日記には、（1867年9月に）ウィルトシャーの「ジャガード・ハウス」で青衣の女の幽霊が現れたことが話題に

なっていたが、その屋敷の現テナントのバルマー氏から届いた5月18日付けの手紙を、氏の依頼で、幽霊に関心を持つスライゴー卿に伝えたこと、追伸に「1874（？）年に月一回の割合で『フォートナイトリー・レビュー』にウォレス氏の『スピリチュアリズム』が載りましたが、お読みになりましたか。とても興味深いものです」と書いたと記している。バルマー氏の手紙には、氏自身は、青いドレスの裾を引く幽霊の後ろ姿だけを見たが、そこに泊まった或る夫人は、階段を下りてくる苦悩の表情を正面から見たそうだと書かれていた (*Diaries* 6, 392-3)。この手紙は、1882年のSPR発足以前の、キャロルと「スピリチュアリズム」の接点を特定するひとつの確かな証拠になるだろう。しかも彼は1873年から『シルヴィーとブルーノ』を構想しはじめていた。前篇の終わりで、恋に破れた主人公が暁の空に向かって「東方に目をむけよ！」と叫ぶところなども、シネットやブラヴァツキーのインド思想への共鳴ととれる。

ウォレスは、1858年ダーウィンと同時に独自の自然淘汰説の論文をロンドンの学士院に提出、当初はダーウィンと歩調を合わせていたが、彼自身マレー諸島の部族と暮らした経験があり、英国文明のほうが未開部族の文明より暴力的で、非情、不作法であることに気づき、精神面では進化論は万能ではないと考え、心霊研究に方向を転換していた。

キャロルは科学者の権威主義的態度にも、父親の所属する英国国教会（ハイチャーチ派）の権威的な典礼主義にも同調せず、スピリチュアリズムへの関心を強め、虚実の不思議を主題化し、『シルヴィーとブルーノ』という物語にし、1893年にはその後篇を完成させていた。

一方熊楠は、1893（明26）年10月ロンドンで土宜法龍と出会う。法龍はシカゴの万国宗教会議やSPR世界大会を終え、パリに向かう途次ロンドンに立ち寄った。そして精力的に、オックスフォードにマックス・ミュラーを、ロンドン大学に仏教学者リス・デーヴィスを、宿泊先から近かった神智学協会のブラバツキー・ロッジにアニー・ペザントを訪ねていた（「八坂書簡1」, 4; 『高山寺蔵南方熊楠書翰 土宜法龍宛』, 14-7）。出会って談論

を楽しんだ二人はその後長く往復書簡を交わす。パリから法龍はSPRのことを尋ねる。「ウエストミニスター寺のなかに“ソサイチー・フォル・サイキカル・リゾールチー”というもののありて、しきりに幽霊等のことを取り調べおり候由。グラッドストン氏（首相在任中）も加わりおり候とか。お取り調べくださらずや。また英国にて目今“スピリチアリズム”は如何に流行致しおり候や。シネットという仏教家は如何に致しおり候や。“オックルチズム”は如何に行われおり候や」（「八坂書簡2」, 8）。しかし熊楠は、チベット仏教や夢には関心があること、ブラヴァツキーの本『ヴェールを剥がされたアイシス（1877）』の四冊のうち二冊は読んだが、核のない本だったこと、幽霊会のことは知らないこと、オックルチズムの書は随分買ったが、「飯食わぬ人、幽霊と語る人の伝ぐらい」で理論がなく漠然としていること、それよりはユダヤ人のカバラという方術なら理論も事典もあることなどを伝えていた（「八坂書簡3」, 22）。

そして1年後、「ワリス氏（現存）は、心性上の開化は物形上の開化とは大いに違い、一盛一衰するが、決して今のものが昔にまされりといいがたし、と。これは仁者（法龍のこと）の言によく似ている」と書く（「八坂書簡23」, 157-9）。さらに1900（明33）年10月ロンドンから帰国した熊楠は、和歌山、那智山中で隠花植物採集などを続けるが、1901（明34）年8月16日、京都の東寺にいる法龍に「かの不思議会（SPR）のことは時々調査、また西洋に現行の真言儀軌のことも片はしを窺い申し候ところ、ずいぶんわが真言教はやり方によりては有望と確信いたしおり候……今日欧米に行わるる密教は取りも直さずわが真言教に出づるものたるを知悉せん……近年始めて調べてはしくれを知り、大いに驚き候」と書くに到る（「八坂書簡37」, 247-50）。熊楠とスピリチュアリズムの接点は、法龍と出会い、法龍という「知識のあずけどころ」を得て、新しい思潮へ一步を踏み出した1893年という年にあった。

その6. 病跡

気質、体質、あるいは病跡（Pathography）について見てみる。熊楠は19才の1885年12月23日、東大予備門一年目の冬期休業の初日、「無聊に苦しむ。日々為す所なし」と日記に書く。このことばは、若く快活、豪放な熊楠の性情とはあまりに不釣り合いであったが、そこにキャロルの「メランコリー」と重なるものを感じ、さらに『シルヴィーとブルーノ』後篇24章で教授が「わたしから快活を引けば、答は瞑想です」（399）と言っていたこととも呼応し、瞑想と快活から成る人物像に納得がいった。

熊楠の日記には明記されていないが、彼は予備門時代、自由民権活動家らと交流、水面下でその資金源になっていた。「無聊」と書いた日記の翌24日に国元から60円の為替が届くと、堀尾権太郎（渡米後もともに活動する活動家）が来て急遽換金し、25日には「堀尾権太郎の要用に付き、5円貸す」とある（『南方熊楠日記』1巻、52）。家からの送金の時差で活動資金の用立てがととのわず、為す所なく無聊を感じていたようだ。

熊楠が予備門を中退するに到った「疾を脳漿に感ずる」症状は、その翌年1月4日の「咳嗽にかかる」に始まり、17日の「頭痛、殆ど困憊す」、翌日「頭痛なほ止まず」、21日「病なほ癒えず」、22日「本日より飲酒を禁ず」、30日「紛飛竟日已まず。午後鉄道馬車に駕して還る」、など長引き2月の癲癇に至る。2月7日「病にて昨夜不眠」、8日「国元へ電信す。国元より返信来る」、9日「午後4時まで臥す」、2月11日「父及藤助来る」、2月24日には頭痛のため帰郷を延ばし、27日に「着郷」。このさなか1月29日には『佳人の奇遇』四冊を購う（『日記1』、52-64）。予備門中退は熊楠にとって慚愧なことではなく、むしろ意図的だったとさえ思える。のちに柳田国男への手紙に、19才で読んだ『佳人の奇遇』に触れ、「一寸の国権を外に延ばすは一尺の官威を内にふるよりも急務なり」の言葉に感銘、渡米を決めた、と言っている（明治44・10・17付柳田宛書簡『全集8』、201）。

1886年念願かなってアメリカに渡った熊楠は、相変わらず仲間の活動資

金源として頼られるが、1888年以降父親が家業を兄弟に譲ってから送金が滞りがちになり、仲間に用立てた金の返却の目処もたらず（およそ10人に借り倒された、と法龍に告げている「八坂本書簡29」, 196）、活動家らとの荒んだ日々を送る。そんななか1889（明22）年2月には在米民権家たちと新聞「大日本」を発行、しかも在米日本人愛国同盟代表の福田友作に代わって主筆を務める（色川大吉『自由民権』, 201）。「大日本」やその後の回覧新聞「珍事評論」でも、しきりに熊楠は人種偏見問題の是正を説いていた。しかし体調を崩す。日記にはアナーバ滞在中の1889（明22）年4月27日「夜癲癇発症」とある。その後情動の波がはげしく、10月21日に「日本のゲスナーになる」と発奮したかと思うと、26日の日記には「ふけてかわざしうつおときけば身にやよるらむ年の波」と、23才で寄る年波を憂いている。この歌もまた無聊に苦しむ苦悶の叫びと見てよいだろう。ここにも経済事情がからんでいた。自縛に陥った熊楠は中南米での植物採集を決行するが、このとき彼をふたたび博物学採集に導いたのが、シカゴの地衣類、菌類研究家のカルキンスであった。しかし結局、アメリカでの生活に挫折を感じた熊楠は1892年渡欧を決意、8月12日に父親に手紙を書く（実際は8月8日に父は病没。9月28日ロンドン到着後、弟からの手紙でその訃を知る）。

次第にロンドンでの生活にも慣れ、法龍と往復書簡を交わし、「ロンドン抜書」を制作しつつ英文論考の発表を重ねる活躍期が続くが、1897年11月8日の日記に「博物館書籍室に入りさま毛唐人一人ぶちのめす。これは積年予に軽侮を加しやつ也」と書いたような問題を起こす。近藤俊文は、熊楠の癲癇の発作やロンドンでの白人殴打事件などに触れて、周期的不機嫌症という精神病理学的状態をあげ、熊楠の日記の随所にあらわれる不眠、頭痛、病的飲酒、易興奮生、暴力は、彼の情動の周期的変動や迫害念慮と無関係ではないとみる（近藤、102）。

加えて弟から1898（明31）年12月21日付けで「学費送金今より不能」の申し状が届く（『珍事評論』, 215-7）。翌年5月末熊楠は弟に、夏期間大学

が休暇に入り働き口がなくなるので、8月から11月まで月80円ずつ送って欲しい、と懇願する。同じ手紙で、道で子どもに「支那人」と言われて怒り、追いかけて行くと連れの子が丁寧に、「貴君は日本の紳士に非ずや、彼のものは学校中の悪まれものなり、何ぞ尊拳を労するに足らんや」と言うので、その子の顔をみると末弟楠次郎に似ていて思わず涙を流して謝った、と書いている(221)。この時期もまた感情の起伏が激しく、多事多難で無聊の渦中にあった。

三回の無聊はいずれも、経済事情の悪化にともなう飲酒や頭痛と結びつくものであった。お金は熊楠にとって一番深刻な問題だったようだ。

つぎに、キャロルの病跡を日記にみってみる。1856年1月17日ロンドン滞在中、右目の視力が欠ける症状を眼科医ボウマンに診てもらう(*Diaries* 2, 22)。6月18日ロンドンで耳鼻科医の名医トインビー博士を訪ね、右耳の難聴の診察を受ける。それでもキャロルの難聴は治らなかった(83)。

五十代には二度、癲癇の記録がある。一度目は1885年12月31日の朝ロンドン滞在中に起きた。「(Dr. モーズヘッドは“癲癇性”と診断)いつもの自分ではないようで気分がすぐれず頭痛が十日近く続いた。エドウィン(弟)とファニー(姉)が来てくれ、Dr. モーズヘッドとDr. ステッドマンを呼んでくれた。発作は軽かったようだ。コリングウッド家のケースにはあったが、わが家には今までなかった症状」と、その模様を記録している(*Diaries* 8, 255)。またこの年5月23日、右目に変調をきたし「朝、動く要塞が見える奇妙な視覚障害が二度あり、そのあと頭痛が続いた」(201)。同じ症状は1888年6月12日にも「レイサム博士(Dr. Latham)の本に『胆汁症の頭痛』とあるような、要塞の見える変調が右目の隅に起こった。頭痛はない」(399)、12月3日には「左目の右端に暗点が見え、すぐあとに要塞が見えた」(435)と、左目も患っている。二度目の癲癇発作は、1891年2月6日、クライスト・チャーチ・カレッジの聖堂で朝の礼拝の終了間際に起きた。「(一時間ほどして)気がつくと、鼻血を出して座席の床に倒れていた。足台にぶつけたらいい。これほどひどい発作は初めてだ。Dr. ブ

ブルックスを呼んでもらった。頭痛が続いたが、それほどひどくはならなかった。Dr. ブルックスは失神だといったが、癲癇だと思う」とある（Dr. ブルックスはオックスフォードでのキャロルの主治医）。12日には「まだ頭痛がすっかり治らない。今日Dr. ブルックスも、やはり癲癇の発作だったようだったと言った」（549-50）。

二度の癲癇にはさまれた時期、キャロルは『シルヴィーとブルーノ』二部作を書くのに余念がなかった。

その7. 幽霊

シルヴィーとブルーノは妖精の姉弟で、シルヴィーは妖精の精神性を、ブルーノは妖精の身体性をあらわす記号になっている。この物語は幻像の不思議を主題にするという、文学史上かつてない構造であるため難解と評された。そこでキャロルは後篇（1893）の序文でその技法を明かした。

もし妖精が存在し、ときにわたしたちの目に見え、かれらの目にもわたしたちの姿が見えるとしたらどうなるか。また、もし人間が——「密教」に見られるように、妖精のような実体のない本質がわたしたちに作用して——妖精界を知覚出来るとしたら、どんなことが起こりうるか。……さまざまな心理状態を、変化する意識の度合いに応じて a) 現実界、b) 妖気（eerie）を感じる状態、c) トランス状態、に分け、ありのままを提示したかった。（序文, xiii）。

次は『シルヴィーとブルーノ』後篇19章から語り手「わたし」とヒロインのミュリエルが、「森」の中で対話をする場面である。

「このまえ、論理上不可能ではない証拠があれば、どんなことでも受け入れられる、とおっしゃいましたわね。説明できる例としてあなたは幽霊をお考えでしたね。妖精はもう一つの例になりませんか」「ええ、そうのとおりです」「そうしますと妖精はどんなところに棲んでいるとお思いですか？」（中略）

「生命はいたるところにあると思います——実体の在るものや五感で捉えられるもののほかに、実体のないものや目に見えないものにも。わたしたちの内には実体のない本質——魂（soul）や霊（spirit）と呼んでいるもの——が在るのを感じますが、わたしたちの外側にも同じような本質があると考えてはなぜいけないのでしょうか。それらを目に見えるものや物質的肉体とつなげて考えてはなぜいけないのでしょうか……まだ誰にも言っていないのですが、そしてただの白日夢かもしれませんが、わたしは、こちらの世界と妖精たちの世界との二つの生（ダブル・ライフ）を生きてきました」と告げる（300-3）。

熊楠が1911（明44）年に発表した『田辺随筆』のなかに「千里眼」がある。そのなかで彼は那智山に隠棲、採集をした日々を振り返っている。

予那智籠居中、いろいろの示現、靈感様のことあり。また實際顕微鏡的の微よう生物を志集むるには、相場師同然、夢兆などを頼む外に宛のなき物なり。……追い追いは白昼にも幽霊を見るようになり、示現し教える者が、幽霊か夢か分からぬことなりしゆえ、いろいろ考察してついに大発明とみずから言う結果を得たり……かかる経験を多く記し集め、長論文を草し、英国不思議研究会へ出さんと意気込みおるうち……ワラス氏も言えるごとく変態心理の自分研究ははなはだ危険なるものにて、この上続くればキ印になりきること受け合いという場合に立ち至り、人々の勧めもあり、終にこの田辺に來たり（『熊楠全集 6』、10）。

片やフィクションとは言え自伝的な物語であり、語り手は作者の分身である。どちらにもシネットやマイヤーズなどの思想が背後にあって、「森」や「山」をそれぞれの場所として持つものの告白になっている。

その8. 狂気

1893年SPRに関心を示す法龍を揶揄していた熊楠であったが、10年を経て、1903年1月からルソーの『告白』や『社会契約論』を読み続け、5月

にはロンドン大学の日本文学研究者ディキンズと手紙を交わし、6月から7月まで『方丈記』（ディキンズと共訳）の英訳に励む。そして7月18日、法龍にあてた書簡に、一見脳のような立体形で、中心の萃点を通ったりかすめたりしながら全体に関係する不思議な曼陀羅図を書く。同じ手紙で『方丈記』の英訳完成を知らせ、その体はルソーの『告白』にならった、と言っている。日本の古典文学やルソーを読み込んでいたのもそのためだったようだ。アリタレーションやライムにも注意を払ったと言っている（「八坂本書簡46」, 363）。そして7月22日の日記に、「終日在寓、午後仮寝ス。ソナンビュール（夢中遊行）如き症をおこす」と書く（『日記2』, 363）。そして10月5日からは一ヶ月入院している（『日記2』, 378-381）。「千里眼」の中では入院の理由を「熊野で、不思議学で脳を痛めたため」と書いている（『全集6』, 10）。1904年2月マイヤーズの遺作（1901年病没したマイヤーズの未完の遺稿を身内が補完し、1903年『人間個性とその死後存続』（*Human Personality and its Survival of Bodily Death*）として2巻本で刊行）を手に入れた熊楠は連日読みふけた。

次に『シルヴィーとブルーノ』から、狂気の描写を見てみる（前篇は柳瀬訳で読まれているので、ここでは未訳の後篇からのみ）。9章で、妖気風の気分ゆえに口をついて出た自分の発言に語り手は、「“狂気の衣装”は身ニルヴァーナにまとうのも難しいが、脱ぎ捨てるのはさらにむずかしい。さっきのような言葉はあきらかに“精神異常”と（カルテに）書き込まれるのに十分だ」（130）。10章で、現実と妖気風のはざまで驚くところでは「ショックというより、夢の中のような理屈に合わない感情鈍磨のような気持だった」（152）。16章でミュリエルの父親は、「死後の世界について考え続けているのだが、白日夢みたいで自分でも納得していないのだが……生きている間永遠に学問や知識に取り憑かれたまま満足できないのなら、自己の消滅、仏教徒のいう涅槃こそが願いだ」と言う（257-8）。物語は19章で誤ってアーサーの死が報じられ、25章で「死からの生還」をする。24章で、わろがきのアガッグがヤマアラシ（Porcupine）に変えられるところがあるが、こ

れはpreoccupied（こころを奪われた＝狂った）とPorcupineの地口になっている（387-389）。

9. テレパシーと千里眼

『シルヴィーとブルーノ』前篇2章に、列車で語り手のそばの席に乗り合わせた若い女性の厚いヴェールごしの顔を想像する場面がある。

——テレパシーの実験にはまたとない機会だ！彼女の顔つきを考え出して（think out）、あとでその肖像を原物とつきくらべるとしよう……最初はその努力もいっこうに実をむすばなかった……それでも次第に、ある程度の思考の集中によって、ヴェールを考え剥ぐ（think away）ことができて……完全に考え剥いでしまうと、それはまごうかたなく幼いシルヴィーの愛らしい顔だった！（柳瀬訳、34）。

「するとシルヴィーの夢を見ていたのか……それならこれが現実だ。それとも現実にシルヴィーといっしょだったのか。それならこっちが夢だ。人生そのものが夢なのだろうか？」（35）と、キャロル年来の命題に入りこんでゆく。「テレパシー」と言う語は1882年マイヤーズが心靈研究協会の会報「心靈研究」1号で初めて用いた造語である。

一方、熊楠は「千里眼」で次のように言う。

心理学者のいわゆる閻下考慮（サブリミナル・ソーツ）、仏説にいわゆる
ま な し き 未那識、あ ら や し き 亞頼耶識様の物ありて、昼夜静止なく考慮し働きながら、本人みず
 からしかと覚えぬ一種の脳力ありとせば、予が多年の経験より類推して、み
 ずから知らぬうちに、地勢、地質、氣候等の諸件、かくのごとく備わりたる
 地には、かかる生物あるも知れずと思ひ中れるやつが、山居孤独、精神に異
 常を来せるゆえ、幽霊などを現出して指示すと見えたり（『全集6』、10-11）。

と言って、むしろ「物界、心界の関頭たる死の学問あるを聞かざるはいかなる手落ちぞや。死に瀕せること、たとえば氣絶中の心相ごときも大いに攻究すべし」（12）と、来るべき新しい学問、フィリップ・アリエスの

『死を前にした人間』(1977)や加藤周一・ライシュ・リフトンらによる『日本人の死生観』(1977)のような学問の到来に近いことを渴望していた。

10. ‘Litterature’

『シルヴィーとブルーノ』前篇序文でキャロルは、折にふれて心に浮かぶ半端な思いつき、無から出し抜けに起こる非論理的な現象の「原因なき結果」のたぐい、夢のなかに現れた断章, などを litterature (litter と literature の鞀語でキャロルの造語。柳瀬訳は^{ぶんがく}紊学散乱物)と名付けた。そしてこの物語は、それらの膨大な混沌としたパーツを10年がかりで繋いだものであると言っている(序文, 6)。

熊楠は1903年8月20日付けの法龍あての書簡で次のように言う。

人間と距絶してこの辺の杣も行かぬ所にゆき、久しくおりてみるに、物質界の影響を受くることなるべく少なくして見るに、心界にいろいろ雑多の相を現出す。その妙はちょっといえぬなり。また実に筆にすることがならぬなり。いまの心理学に意、思、識、と三別するような愚かなことになく、実に千万無量の異なる無名不可名の心相のはたらきを現出す(「八坂本書簡49」, 370)。

ここで言う言葉で言い表せず、筆にすることも出来ないような心界に現れる雑多の相や、無名不可名の心相のはたらきこそ、キャロルの言う litterature に該当するものではないだろうか。キャロルがそれらを『シルヴィーとブルーノ』に籠めたように、熊楠はそれをあの南方曼陀羅図に籠めたと考えたい。

おわりに

気質の似たキャロルと熊楠の象徴的なふたつの世界、すなわちキャロルの『シルヴィーとブルーノ』二巻本と、熊楠の「事の学」の土台になった

法龍との往復書簡から、10項目のトピックを選び、相互の関連をふまえながら「夢十話」としてまとめた。もとより超人的な二人を比較するなど、出来るはずもないが、近代幻想物語の一つの源流、そして南方学の発生の源流に一步近づくことができたように思う。

ここに書いたものは覚え書きのようなものであるが、19世紀末のイギリスという、時と場所をクロスしたキャロルと熊楠を知るための小さなヒントになればと願っている。

〈参考文献〉

- Lewis Carroll, *Sylvie and Bruno*, Macmillan, 1889. 柳瀬尚紀訳, れんが書房新社, 1976 ; *Sylvie and Bruno Concluded*, Macmillan, 1893; *The Letters of L. Carroll*, 2 vols. ed. by Morton N. Cohen, Macmillan, 1979; *Lewis Carroll's Diaries*, 10 vols. ed. by Edward Wakeling, The Lewis Carroll Society, 1993-2007; *The Lewis Carroll Handbook*, ed. by William, Madan, Green, rev. ed. by Denis Crutch, Dawson Archon, 1979.
- “The Carrollian”, No.3, Spring, 1999, The Lewis Carroll Society.
- 南方熊楠, 『南方熊楠全集』全十巻及び別巻一, 二, 平凡社, 1975 ; 『南方熊楠日記』一巻～四巻, 八坂書房, 1987 ; 『南方熊楠 土宜法龍 往復書簡』, 八坂書房, 1990; 『高山寺蔵土宜法龍宛 南方熊楠書翰』, 藤原書店, 2010; 『南方熊楠 珍事評論』, 平凡社, 1995 ; 『南方熊楠 英文論考』「ネイチャー」誌篇, 集英社, 2005.
- 近藤俊文, 『天才の誕生』あるいは南方熊楠の人間学, 岩波書店, 1996.
- ジャネット・オッペンハイム, 和田芳久訳, 『英国心霊主義の擡頭』, 工作社, 1992.
- デボラ・ブラム著, 鈴木恵訳, 『幽霊を捕まえようとした科学者たち』, 文芸春秋, 2007.
- 安藤礼二, 『光の曼陀羅』, 講談社, 2009 ; 『場所と産霊』, 講談社, 2010.
- ジョナサン・コット, 鈴木晶訳, 『子どもの本の八人』, 晶文社, 1988.
- ラフカディオ・ハーン, 池田・立野他訳, 『ハーン著作集』第六巻, 恒文社, 1980.
- 平 倫子, 『ルイス・キャロル 身体医文化の実相』, 英宝社, 2008.

Ten Anecdotal Phantasma regarding Lewis Carroll and
Minakata Kumagusu

Kumiko TAIRA

《Abstract》

This paper is an attempt to know more about both Lewis Carroll and Minakata Kumagusu, a Japanese naturalist who lived in London during the period 1892-1900. I have chosen ten topics from their writings and have created ten tentative anecdotes concerning the two authors. The topics are, 1) Temperament, 2) *Nature*, and *Notes and Queries*, 3) Dreams, 4) Spiritualism, 5) 1893, 6) Epilepsy, 7) Ghosts, 8) Madness, 9) Telepathy, and 10) 'Litterature.'